



Title	近年の英語圏のサハリン/樺太史研究
Author(s)	ブル, ジョナサン; 中山, 大将//訳
Citation	北方人文研究, 13, 159-163
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77249
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_11_Bull.pdf



近年の英語圏のサハリン/樺太¹⁾史研究

ジョナサン・ブル
(北海道大学)

サハリン/樺太関連の英語出版物は日本帝国の他の植民地に比べると相対的に乏しいと言える²⁾。最も知られたジョン・ステファン『サハリン』が出版されたのは、英語による日本帝国に関する歴史研究がほとんどなかった1971年であった³⁾。ステファンの著作は、サハリン島を論じるにあたって、その領土権主張や実際の領有が時代とともに変遷したことをふまえることの重要性を提起した。ローマン・マイヤーズとマーク・ピーティーが1984年に日本帝国についての講義テキストを出版したとき、ふたりは樺太に関する研究をそれにひとつも含めなかった⁴⁾。結果として、日本帝国の他の植民地に対して提起されていた研究課題を樺太植民地史に対しても検証することは比較的近年まで見られなかったのである。

マイヤーズとピーティーの著作が刊行された時期は、ポストコロニアルの観点から帝国研究に対するアプローチが現れつつあった時期でもあった。エドワード・サイードの著作は、文化やイデオロギーが帝国主義の実現にいかに関与したのかを研究者たちに考えさせるようになった⁵⁾。帝国主義の展開は政治経済的側面からのみ説明可能だという議論に対して、サイードは、教育や文学、視覚・聴覚芸術の影響力について検討する重要性を指摘した。日本帝国を分析する歴史研究者たちは、公文書や政府統計だけではなく、それ以外の資料も使うようになった。旅行案内書や川柳、映画フィルムといった多様な資料群が、重要な論文や研究書の基礎となった。テッサ・モーリス＝スズキは、日本帝国の中に樺太を位置付けることに一定程度的影響を与え続けてきた研究者である。1990年代末から2000年代のはじめにかけて、モーリス＝スズキは樺太に関する三つの論文を発表している。すなわち、日露国境の形成⁶⁾、元樺太住民の戦後サハリンへの旅行記⁷⁾、1930年代から1940年代

1) 本稿では、サハリン・樺太史研究会の慣例にしたがい、「サハリン/樺太」をサハリン島南部という意味で用いる。

2) サハリン/樺太についての研究は、経済学や文化人類学、国際関係論などの諸分野においても見られるかもしれないが、本稿では主に歴史研究に主眼を置く。本稿では、英語出版物に言及する場合を除き、日本人の氏名については氏を先に記す。

3) John J. Stephan, *Sakhalin - a history* (Oxford: Clarendon Press, 1971). [訳注：和訳として、ジョン・J・ステファン（安川一夫訳）『サハリン：日・中・ソ抗争の歴史』（原書房、1973年）が刊行されている。]

4) Ramon H. Myers and Mark R. Peattie, eds. *The Japanese colonial empire, 1895-1945* (Princeton: Princeton University Press, 1984).

5) Prasenjit Duara, "Empires and Imperialism," in *A Companion to Global Historical Thought*, eds. P. Duara, V. Murthy and A. Sartori (Malden: John Wiley & Sons, 2014), 201-217.

6) Tessa Morris-Suzuki, 'Lines in the Snow: Imagining the Russo-Japanese Frontier,' *Pacific Affairs* 72, no.

にかけての入植者アイデンティティの形成に関するものである⁸⁾。三つ目の論文では、映画や雑誌、文学作品を用いて、植民地フロンティアとしての樺太と日本に不可欠な部分としての樺太の表象の間に、樺太の入植者アイデンティティがいかに板挟みになっていたのかを検証した。

モーリス＝スズキの初期の研究は、帝国の他の地域や他の帝国との比較を喚起させながら、日本帝国の中央と周縁の緊張関係を強調した。しかしながら、モーリス＝スズキのこれら研究の中には、植民地社会を作り上げた人々の中に存在していたはずの考え方の多様性が見落とされていることがしばしば見受けられる。モーリス＝スズキがこれら三つの論文を発表した後は、帝国や帝国主義を分析する歴史研究者たちは中央－周縁アプローチから遠ざかっていった。中央－周縁アプローチは、周縁を中心部の及ぼす影響を受動的に受け入れる場として描いているとして批判されたのである。帝国に関する先行研究への他の批判としては、植民者と被植民者を区別することは不毛すぎるというものがある。最近の研究者は「植民地近代性」や「帝国のレパトリー」^(訳注)という概念を用いて、主に強者による弱者への搾取についての初期の帝国の語りを複雑化させている。「争われている土地の人々は、より強力な政治の侵犯に対して、自分たちの好みに応じて、反抗し、そらし、あるいはねじることができた」⁹⁾とふたりの主導的帝国史研究者は説明する。英語圏の日本帝国研究においては、そうした植民地の研究へのアプローチを内田じゅんの『帝国のプロローグ』の中に見出すことができる¹⁰⁾。内田は、朝鮮の日本人入植者は日本帝国の形成において重要な役割を果たしたと主張する。

この10年間に於いて、ブルバンクとクーパーの提案したアプローチに続く研究が英語圏で数多く現われた。樺太に関する最近の論文で、モーリス＝スズキは、「『北方文化の誕生』の文化的構築は、植民地政策決定者や博物館の学芸員が望んでいたであろうよりも複雑な現象であった」と認めている¹¹⁾。豊原の建築と都市計画の研究に加えて、モーリス＝スズキは日本帝国の環境史の中に樺太を論じることにその関心を向けている¹²⁾。モーリス＝スズキは、植民地官僚の森林経営（あるいはその失敗）は先住民族の生活を劇的に改変させ、「あいまいで、不安で危うい近代性」へと先住民族を導いたと主張する¹³⁾。タニ・バーローの「植民地近代性」という概念¹⁴⁾に対して、モーリス＝ス

1 (Spring 1999): 57-77.

7) Tessa Morris-Suzuki, 'Sakhalin: On the Frontiers of Memory,' *Meanjin* 57, no. 3 (1998): 525-540.

8) Tessa Morris-Suzuki, 'Northern Lights: The Making and Unmaking of Karafuto Identity,' *The Journal of Asian Studies* 60, no. 3 (August 2001): 645-671.

^(訳注) 原語は'imperial repertoires'で、ブルバンクとクーパー（次注参照）は「特定の歴史的条件下において想像可能で実現可能な支配戦略の範囲」と定義している。

9) Jane Burbank and Frederick Cooper, *Empires in World History: Power and the Politics of Difference* (Princeton: Princeton University Press, 2010), 3.

10) Jun Uchida, *Brokers of Empire: Japanese Settler Colonialism in Korea, 1876-1945* (Cambridge MA: Harvard University Asia Center, 2011).

11) Tessa Morris-Suzuki, 'Colonialism and Migration: From the Landscapes of Toyohara' in *Transnational Japan as History: Empire, Migration, and Social Movements*, eds. P. Iacobelli, D. Leary and S. Takahashi (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2016), 97-120, 113.

12) Tessa Morris-Suzuki, 'The Nature of Empire: Forest Ecology, Colonialism and Survival Politics in Japan's Imperial Order,' *Japanese Studies* 33, no. 3 (2013): 225-242.

13) Ibid. 240.

14) Tani Barlow, ed., *Formations of colonial modernity in East Asia* (Durham NC: Duke University Press, 1997). Introduction.

ズキは「植民地抑圧者と植民地被害者」の二項対立を越えた視点の重要性を強調する¹⁵⁾。

モーリス＝スズキの初期の研究への主要な批判のひとつは、その研究が地理景観（豊原）と樺太社会全体を記述するにあたって、限られた資料から推断しているというものである。スティーブン・アイビングスは、ロンドン・スクール・エコノミクスに2014年に提出した博士論文で異なるアプローチを採用した¹⁶⁾。経済史研究者として、アイビングスは公文書と政府統計から公式の入植政策の有効性の程度を検証し、樺太庁の農業入植政策は樺太に日本人による恒久的定住地を確立するには限界があったと結論付けた。樺太の社会史を理解するためにより重要な要素は、出稼ぎ労働現象である。アイビングスの博士論文は、政策や数値の分析に留まらない豊富な内容を備えている。アイビングスは、樺太日日新聞と1970年代に収集された野添憲治と田村憲一の聞き書きを有効に使い、出稼ぎや季節労働に従事していた人々の生活に対する洞察を行なっている¹⁷⁾。このアプローチは、初期の研究では見落とされていた方法で植民地社会の複雑性を明らかにした。博士論文のうち六つの章はすでに『労働史』という英文誌に発表されている¹⁸⁾。

樺太に関するものではないものの、ブレット・ウォーカーの著書『アイヌの土地の征服：日本の拡大における環境と文化 1590～1800』は、日本帝国の起源をめぐる解釈に影響を持ち続けている¹⁹⁾。同書の刊行以降、ウォーカーはその関心を18・19世紀の日本の北方進出における地図製作の役割に向けた²⁰⁾。ウォーカーは、間宮林蔵と伊能忠敬がネイションと帝国の形成にいかに関与したのかを明らかにするために、ふたりが作成した地図を検証した。地図の作成それ自体には関心はないものの、山本敬洋はウォーカーの議論をふまえて19世紀中盤の東アジアに現われた日本とロシアというふたつの帝国の緊張関係を検証した²¹⁾。外交史を中心に、山本は日本とイギリスの文書館資料を用い、日露間のサハリンをめぐる交渉を「多国間外交」としてとらえなおした。山本は、アメリカとイギリスがサハリンに影響を持つことへロシア帝国政府がいだいた懸念によって生じた、日本がサハリンに足場を築くことを防ごうとするロシアの意図に注意を向けた。山本が発見したのは、日本の北方進出における複雑な情勢のもうひとつの事例である—以前は日露関係だけで決定されていた—。この学会誌論文は、幕末から明治にかけての日本の境界地域の出現を再検証する一大プロジェクトの一部分である。山本が2015年に提出した博士論文には、同時期における北海道、サハリン、千島に対する日本の行動について論じたふたつの章が含まれている²²⁾。

こうした個人研究がある一方で、サハリン／樺太に関する英語刊行物での主要な貢献をなしたの

15) Morris-Suzuki (2013), 240.

16) Steven Edward Iving, 'Colonial Settlement and Migratory Labour in Karafuto 1905-1941' (PhD diss., London School of Economics and Political Science, 2014).

17) 野添憲治、田村憲一編『樺太の出稼ぎ〈林業編〉』秋田書房、1977年。

18) Steven Iving, 'Recruitment and coercion in Japan's far north: evidence from colonial Karafuto's forestry and construction industries, 1910-37,' *Labor History* 57 no. 2 (2016): 215-234.

19) Brett Walker, *The Conquest of Ainu Lands: Ecology and Culture in Japanese Expansion, 1590-1800* (Berkeley: University of California Press, 2006).

20) Brett Walker, 'Mamiya Rinzo and the Japanese exploration of Sakhalin Island: cartography and empire,' *Journal of Historical Geography* 33 (2007): 283-313.

21) Takahiro Yamamoto, 'The end of the 'dual possession' of Sakhalin as multilateral diplomacy, 1867-73,' *Historical Research* 89, no. 244 (2016): 340-362.

22) Takahiro Yamamoto, 'Balance of Favour: The emergence of territorial boundaries around Japan, 1861-1875' (PhD diss., London School of Economics and Political Science, 2015). Chapters 3 & 5.

は、スヴェトラナ・パイチャゼとフィリップ・シートンが編集した論文集である。ルートリッジのアジア近代史シリーズの一環として刊行され、同書の執筆者は、歴史研究者や社会学者、地理学者から成る²³⁾。樺太の歴史で着目されている側面のひとつは、入植者が戦後社会では引揚者に転じていることであり、これは重要なことである。なぜならば、日本の指導的な樺太史研究者の一部は、この問題に関する研究の欠落をすでに認識していたからである²⁴⁾。全11章のうち、7章がポストコロニアルな移動の諸相に言及している。フィリップ・シートンと宮下雅年の両章は、博物館や記念碑や故郷再訪に表象される日本人元樺太住民の記憶に焦点をあてている。兎内勇津流の意義深い貢献は、ロシアの文書館資料も用いて、「混乱の時代」や「日本がロシアになったとき」と形容される1945～1949年の4年間を分析したことにある²⁵⁾。

兎内の章は、いかに戦後サハリン入植が進められたのかをソ連入植者の観点から検証したゾーレン・ウルバンスキーとヘレナ・バロップの最近の論文と並べることができる²⁶⁾。サハリンの戦後入植をカーニングラードにおけるソ連の政策と比較することで、ウルバンスキーとバロップは、先行研究がすでに価値ある研究として認めていた両者の比較研究を実現したのである²⁷⁾。

サハリンにおける日本人の退去とロシア人の進出の双方は、「もう一方」を軽視したり、あるいは一方がより良い入植を行なったのだと主張する傾向がある。ジョナサン・ブルは、戦前からの「入植者アイデンティティ」が、戦後北海道での新生活へと引揚者が移る過程において、どのように新らたな用いられ方をするのかを検討した²⁸⁾。ブルは、1945年以降に北海道に現われた数多くの引揚者団体の指導者たちが、樺太での「寒地」経験を根拠に引揚者には北海道開拓のための技能があるというイメージをいかに前面に押し出していたのかを検討した²⁹⁾。1956年の「在外事実調査票」のデータを用いて、アイビングスは引揚者が1950年代中盤までにどのような職を得ていたのかを明らかにした³⁰⁾。引揚者団体の指導者たちが農業への適性を強調していたにもかかわらず、農業に職を得た引揚者は比較的少数であった。職を求めて北海道の都市部へ移動することが最も一般的なパターンであったことが証明された。ブルとアイビングスは「樺太引揚者」のイメージの脱構築を図っ

23) Svetlana Paichadze and Philip Seaton, eds., *Voices from the shifting Russo-Japanese border: Karafuto/Sakhalin* (Abingdon: Routledge, 2015).

24) 加藤聖文「ソ連軍政下の日本人管理と引揚問題：大連・樺太における実態」『現代史研究』第5号、2009年、1-19頁、2頁注2。

25) Mariya Sevela, "How Could You Fear or Respect Such an Enemy? The End of World War II on Sakhalin," in *The Japanese and Europe: images and perceptions*, ed. Bert Edström (Richmond: Japan Library, 2000): 172-192, 174.

26) Sören Urbansky and Helena Barop, 'Under the Red Star's Faint Light: How Sakhalin Became Soviet', *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History* 18 no. 2 (2017): 283-316.

27) 竹野学「樺太からの日本人引揚げ（一九四五～四九年）：人口統計にみる」今泉裕美子ほか編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究：国際関係と地域の比較から』日本経済評論社、2016年、259頁。

28) Jonathan Bull, 'Karafuto Repatriates and the Work of the Hakodate Regional Repatriation Centre, 1945-50,' *Journal of Contemporary History* 53 no. 4 (2018): 788-510; Jonathan Bull, 'The Making of Karafuto Repatriates' (PhD diss., Hokkaido University, 2014).

29) Jonathan Bull, 'Occupation-era Hokkaido and the emergence of the Karafuto repatriate: the role of repatriate leaders,' in Paichadze and Seaton (2015): 63-79.

30) Steven Ivings, 'The economic reintegration of former colonial residents in postwar Japan,' in *The Economic and Business History of Occupied Japan: New Perspectives*, ed. Thomas French (Abingdon: Routledge, 2018): 149-170.

た。比較的円滑な旧植民地エリートの戦後への「横滑り」の経験が、多くの「ふつうの」引揚者の経験といかに異なるのかを検証することがその最初の段階である。

この10年における英語圏のサハリン／樺太史研究は、ほかの植民地や帝国を専門とする研究者によって提起された植民地社会の複合的理解へと向かってきた。植民地社会において官僚や「半官僚」、入植者のような異なる主体の間に存在する緊張関係に関するより良い研究を我々はすでに有していると言える。今後は、いかにこれらの緊張関係が戦後社会においてもはたらいていたのかについて検証する研究が必要となる。

(中山大将訳)

